



奇說排悶錄  
後集  
二

特別  
21  
2460  
8





尾定

奇說排門錄卷之七下

明斷之部

目錄

揚退菴

于總制

于中丞

李大守

魯大守

費公

大原獄

21  
2460  
12-8

非門錄卷之三



合七種

排門録卷之七下

明斷之部

楊退菴

六樹園翁 譯



西昌地名の楊退菴名卓と云人洪武驛の初廣東地の行省  
 の領外郷と成り居る時周參政と云者有しが頗苛劔の生質  
 中へ人を憐む事あり或日士卒二十人分付山へ遣り木を伐ら  
 士卒共主命を承る。忽ひく山中の分を散り木を伐る。西人の  
 卒山下ゆく。邂逅婦人の獨行又遇り。西人卒婦人を拘へ強て道の  
 傍の林中の申入る。白晝の犯さんをも婦人大に驚馬き怒り罵る  
 從へざるをけし。遂に殺し尸骸を其儘捨置り。逃去する婦人の

排門録卷之七下

二



家ゆゑも婦人歸らざるを人を遺跡跡々る林中ゆく婦人の  
 尸を足出さるる所。是必木を伐る士卒共の所為あるんと  
 即行省と許へ出り。周参政請刺る人あれを速に二十人を捕  
 依り退菴の屬と稔を署せしむ。退菴曰一人の婦人を殺す何ぞ  
 二十人の命を断べんやと云く。周参政の復讐を請ければ周参政  
 然とて曰退菴今人を殺す賊を縱さんとするやと云く。士卒を  
 退菴の付し。復讐を成さめけ。退菴是を庭下の列へ逐一鞠  
 訊く。其顔色を見其言詞を聞急め細卒を指し。婦人を殺す者  
 汝等兩人也速に誅し服せしと罵りけし。西卒大に恐懼し。

吐實し罪を伏し。兩人の初終を知らず。驗むる人殺す  
 徴し見へし。十八人の者を放ち歸らしむ。周参政退菴の向  
 と曰。何を以て審め此を料を知らず。王名。退菴答く曰。二十人の  
 者の公堂盡く同トからんや。必善惡の異有え。且二十人皆在志  
 何ぞ婦人を犯せる哉せんや。犯す事せし猶あり。况や殺せる  
 を得可んやと云けし。周参政其明断を歎服しけり。

于總制

永寧驛の于成龍と云人。黃州の洞知たる時。州内大盜あり。野中の古廟の中を隠し家とせ。成龍敝衣を着て其所に到り。共め伍に入らん。復を願ふ。乃姓名を變じ七場二と云居る事十日。



餘盡く其行劫の状を會得し歸宅。密に捕役め命じて擒め  
 せむ盜怪と問て曰誰ぞ我を捕へしむる者ぞ答と曰于二府我め  
 命とく汝を捕へしむる者率行ける盜府め入と進見せるふ  
 及く仰て刃を干二府と云と即頃擧め入一楊二也盜大め  
 驚とく言ゆ及及を首を俯して罪め伏しる成龍堂を下り  
 自酒を酌く遍く飲しめく曰廟中一日の雅を念と。聊一樽の  
 酒を用ひて訣別をせむ。特め汝等を刑戮め免としめん事を  
 欲し傷とと人をも棺を昇たむる。皆結あがり棺め入  
 と土中め埋まらる。成龍後二西江の地總制め成王ひる。西江強  
 暴の惡黨共逃竄と跡あらむ。一時神と稱せる者あり。

于中丞

于成龍。穽する時鄰邑め行くと。早旦め郭外を經過する。四人  
 中林の上め病女を載せ。大彼を覆ひ枕上髪を露し。髪め  
 鳳釵一股を替しるがええと。とこまた眠る居るを昇行者め。

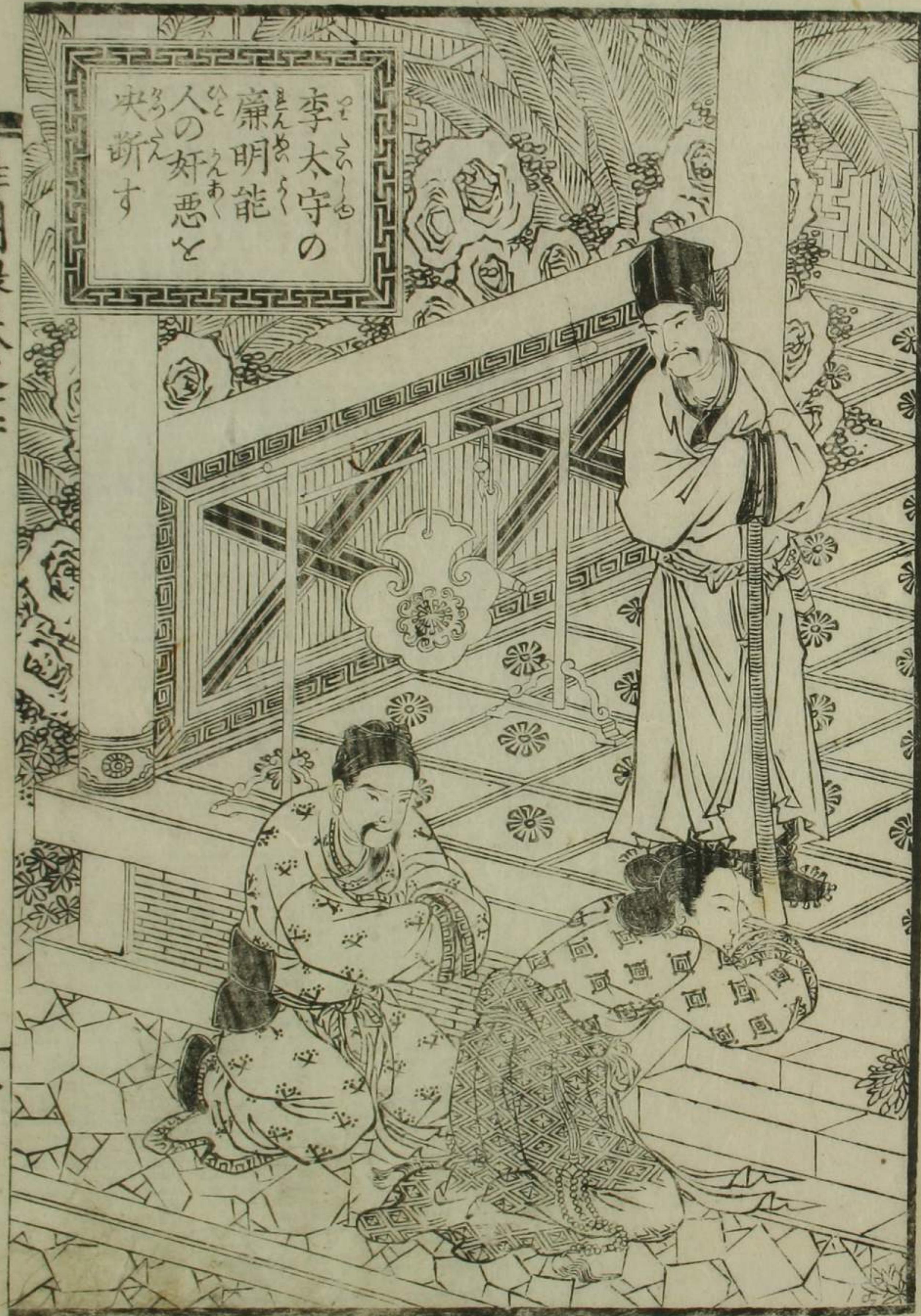
又健男三四人。面傷め付そひく。更番被を擁して身庭を壓へ  
 行さま。胆の入を恐るが如し。少頃と路の傍へ。肩を  
 息め。又代り合と荷ひり。を于公熟視と行過し。鞭と遣と  
 向しめけと。曰妹子の大病ゆと死め垂き故夫の家め送て帰を  
 答ふ。于公又謙を遣と候視せ。其人所何村とのを問て見せしむ。  
 謙是め尾と見え隠と不隨行けと。或村め。其舎と。西



人の男子出迎へて内へ申入る。彼隸を召て速に奔りて歸りて。  
 此趣を白けり成龍を呼ぶ其詭辯小問する。足下の隸下小  
 盗み逢たる者あり事無や否や。答へて是ありと云其法上より  
 切令嚴した故。上下共盗み遇へと云其を諱む。是故に若于の物を  
 或は盗み殺さるる者有共相互に隠し忍びて敢て世首  
 の事嘗とあり。于公館舎不就と家人に囑ふ。密に細く訪むる  
 に果して富室の強盗亂入と。主人炮烙と死せし有。然共其  
 子隠忍びて出首す。于公此言を審み彼知りて其子を喚出して  
 詰るとも子固く承せむ。于公曰我既其巨盗を捕へて獄に下せり。外  
 の子細ありとの至ひけむ。其子忽頓首して哀を位と。恨を雪ぐた由と

願ふ。夫より于公直に彼むらの詭辯を見え。あつぐのるを云く  
 徒彼を着し。密に彼館舎よりあけしを忽八人を捕へて歸りて  
 于公一聞しけむ盡く罪と伏し。于公問て曰彼病婦は何者ぞ。  
 盗み共供する。我等此夜同く勾欄に在り。妓女と謀り合せ。金を  
 林上の置き。女を抱せし臥し。病婦のやうを演かす。窩頓處と云く  
 金を凡分と為あり。あると云く。いかに皆于公の神明と服せし。是を  
 或入于公の此事を能く知る所以を問けむ。于公曰此甚知り易なる  
 あり。但人々を後關ひし故に知らざる。豈少婦床に在り。人の手を  
 合底に入して。知らず容る女わんや。且肩を易く荷ひ行其勢ひ  
 甚重し。病婦一人の状に非ず。互に手を交へて左右なる風の捲らるる







の獲へく行も。必見其内。物も其之若少婦大病。昏續。夫  
の家へ歸る者あり。必婦人門へ倚り迎へ入るべし。止男子耳を驚く  
多し。一言の間尋もせざる。理ゆるんや。是を以て考ま。盜たる。其確  
知ると云はるるをぞ。

李太守

松江名地の李太守。名を某と云人。性廉明。人の奸を發せ。事神の  
如くあり。或時婦人の其夫を討る者あり。曰。妾が夫海賊と通じ。亂を  
作んと欲せしと供す。李太守婦人の向く曰。汝夫と結髪の夫婦ありや。  
婦人答く曰。夫と結髪するの夫婦と雖。然も其反を謀る。其罪大  
なり。災害の妻。及んるを恐る。故に自来し。出首ると云けし。李

太守曰。かく拘へて究む。判状を封じ。使又附し。婦人  
是を見。拜謝し。出る。少間あり。李太守吏。謂く曰。訴状を取  
上た。且牌を行。勿と三日の内。若人來。此事を探。問。若  
わ。速に拘へて。我前。拿來。命。果。二。兩。日。を。踰。人。來  
て。向。者。曰。前。日。婦。人。の。夫。を。出。首。る。事。其。時。已。二。回。の。わ。を。准。  
玉。何。ぞ。速。に。拘。へ。玉。の。吏。給。く。曰。牌。既。又。簽。を。送。り。未。だ。歸。ら。ぬ。  
汝。少。く。待。べ。即。當。拘。へ。來。る。と。云。け。し。其。人。果。し。留。る。吏。内。の  
入。り。太守。斯。と。白。く。即。命。し。て。拿。り。來。り。前。日。吏。の。付。し。野。の  
封。状。を。持。來。ら。ぬ。其。人。の。與。り。自。封。を。開。せ。ら。ぬ。其。人。封。を。發。せ。り。  
是。を。見。ん。狀。中。に。判。し。く。曰。婦。人。の。夫。を。出。首。る。事。世。の。中。の。斷。し。く



無死所也。此吏を如何んと来り探問者。是奸夫と有りて其入  
忽白色土の如く成る。是の於て李太守嚴しく訊く。王(志)果しく  
婦人と奸通して。其夫を誣陷んと謀りて遂に其婦と共に罪を行  
はる。

魯太守

成都地の守。蘄水各地の魯永清と云人訟を決す。雋水の流れど  
く。まじく判断し。而も誣冤の者無く廉明あり。是故に  
門外の数椽の屋を架て。皆銅竈を構へ。訟者至る皆爰に寓居す。  
然と共裁断速く。一たび見れば即決する。故一人も兩次の飯を炊く  
者無く。唯一回炊くのみ。其遠方より来る者。荷檐を解き。中

案結る故。其ある魯不解。擔と云く。揺ひるを。或時姦を松る  
者あり。一方を和姦ありと云。一方を強姦ありと云。臬長自決す。  
こと能く。因り魯太守の送く決を乞ふ。見自決する。能く。能く。能く。  
非也。且魯太守の決法を試んと欲してあり。魯太守即隸の力有  
者の命。婦人の衣を表衣より一ツ宛脱去し。次第に脱く。獨  
裏衣に至り。婦人死す。是をみり脱す。隸如何とせん。方乃ち太  
守笑く。曰。苟の貞節を守らんと欲す。裏衣に脱し。何ぞ犯す  
を。即ち和姦とせむ。

費公

淄川地の西崖莊の賈者あり。夜途中や。何者より殺さる。又







途中も甚珍重し。帰途ゆる卸し袂に累々。袖の中に入て歸せし家あり探す所已に無し。衣を振ると足共無し。驚ききんこと。先夫の告む。然れども隣(償ひ返す力も無し。如何せん)と甚惱苦みて死せんと覚悟を極めたる。是日周成適途中ゆき、足を拾ひ是賈者の妻王氏が遺したるを知る。あまを質とりて不義を志す人と思ひ、竊に賈者の他適を窺ひ夜半垣を踰り入る。時の昏暮の頃あつた。王氏庭中の臥居たり。周成を足と大の喜び、偕に就き、淫むる。王氏始る覺す。既覺く大の驚き、大に號んとし、周成急におを止め、拾ひ、釵を懐中より取り、試を取、袖に入、釵を王氏の手に納む。王氏足を受く。夏已まると、王氏囑して曰、此後必来り

王ある勿と吾家の男子は、死ん人なり。若此夏を覺知せば、必俱に死す。周成大に怒り、釵を鬻り、勾欄數宿の資ありん。其を秋來に汝に贈る。何ぞ一度ゆき償まらんやと云る。王氏足を慰む。曰、妾を相交事を願ざるゆゑ、非ず。然れども速に人夏を欲せし事成らむ。我夫善病め、必久らんとす。死せん。従容として其死を待王と云ふ。周成乃回りて、王氏が夫死して後と云ふを忘るる。能はざる。賈者を途中ゆき殺す。次の夜又王氏が處に移り、曰、今夫已に人殺す。願くも約束所の夫歸り成人。王氏足言を度く大に哭す。悲しむ甚き。咽び入ける。周成心中懼く逃去る。天明く、王も亦自經く死め。費公次第を察し得る。



周成が罪を正しく刑行ひし多。衆人共費公の神又服けり。或問く曰何を以て其所以と察知玉か。費公曰是處は隨と事物に心を留るるに初妻が尸を禪せし時銀裏の袂に萬字を刺し有を認めり。周成が袂も又萬字を刺しあり。是れ一手に知る者一たび詰る及て周成が言語錯乱し。面色忽ちまの如くに變じしる。是を以て其實情を確知しと云けり。聞人皆歎稱せざるを無きなり。

又同所は胡成と云者あり。同埋の馮安と云者と父祖の時より代々互に御わたり睦かたむ。或日西人對飲し薄醉し成り。胡成大言しく曰必貪を憂ひ玉を夏勿と百金の産を成し難き夏非すと

云々。此胡成が家豊あたる者故に馮安を乞ひ強て居りけり。胡成色を正しく曰左思ひ玉の寔の相告るなり。昨夜途中ゆく大滴の厚装を載来る行遇し故我を頼越し南山の智井の中へ擲しと云る事也。馮安尚笑と信とせむ。此時胡成が妹夫の鄭倫と云者あり。田産の賣主有る因り。胡成の託すす百金を寄す。説合を為しむる時ありけり。胡成盡く其金を以て馮安の口せしむる。馮安遂に信とし心中大駭き家へ歸りて其状を邑令の報り。費公即時は胡成を拘へ馮安と對勘せしむ。胡成其寔を白しけり。鄭倫并の産主を喚く向ふ能く無りければ共猶も智井の中を駈せんとく乃皆共智井に至り。一役も命と



布ぬ縋らせ。井の中へ下りて果し一人の首無死尸を牽出  
 多。胡成を口々大に殺罵死。辨おん死詞あり。但寃苦ある哉と云の  
 あり。費公怒り確する証據あり。汝は屈と呼やと云。死囚具を以て  
 禁制せしめ。尸を堅く戒め。井の中より出せしめ勿らめ。只諸  
 村不曉介して尸の王の公状を投ずべしと云ハ一日を逾て二婦人  
 状を抱きて自云。妾も此諸の妻あり。妾が夫何甲。數百兩の金を搦  
 と高ぶら。途中中へ胡成と云者不殺死する。願くも相公衆を正し  
 王と云け。費公曰井中ぬ尸有りと云ふも必汝が夫と指し定め  
 難しと云王共婦人驚く吾夫と云る故左わたりと云。乃尸を井  
 の中より出せしめ。果し一人の首無死尸を牽出。婦人の夫あり

けり。婦人敢て夫の尸に近着ず。二三歩却行きて立ち歸り  
 多。費公曰真犯を己の捕らるるを但骸體未全からざる刑は行ひ  
 難し。汝先暫く歸り死者の首を得るを待て。死者の首を得て即  
 時の上司言上し。其時又抵償せしめん。遂に獄中より胡成を  
 と喚び。訶り曰明日頭を將至せん。當に嚴械し。股を折る  
 と云く。翌日夜ぬ仰ぐ押護して頭を尋む。終日わたり空く歸り  
 けり。費公詰玉の一言の答もせず。但啼泣するは。故乃梏具  
 を以て胡成が前ぬ置き。刑せんとする勢を視せし。即又刑せしめて  
 曰予想ふ汝當夜尸を扛く井中ぬ投ず。時忙迫く何處に  
 墮落せるら知らざるらん。奈何細く尋ねざる。胡成哀く祈く急ぬ



日ごろ 王五が 奸悪  
 遂に 費公に  
 明断 せ發る



非因録卷之三



非因録卷之三



不見る事を容一王と云々。費公婦人の問曰。女子女幾何人の  
 不。婦人答曰。無。又問曰。汝が夫何の戚屬の。答曰。但堂叔  
 一人有の。公慨然とて曰。少年めく夫を喪ひ伶行とく倚る  
 所。爾来何を以て生を為んと云々。婦人願く相公憐悃  
 王と云く哭く。公又曰。人を殺せる罪人。已み定まらぬ。未全尸  
 を得ざる。故此案未消す。但首をる。骸體全く具らぬ。此案即  
 消ん。案消く後。汝速に再醮す。汝少婦。若く復公門に出  
 入する。勿と云々。婦人感泣。頭を叩きて帰る。公  
 即票を所々の懸く。村民示し知らしめ。其首を見得ぬ。持る  
 宿一とあり。一宿を経く。同村の王五と云者。其首を獲く。持る。

叛稱け。費公速に問。王五。其甲が首。多。已み明ら。償  
 一。千錢を賜ひ。甲が叔を喚び。曰。大案已み成る。然。共人命の  
 重。大。積。歳。非。ま。結。を。成。す。度。能。は。む。汝。が。姪。既。み。子。少  
 婦。若。く。存。活。を。成。し。得。難。く。早。く。人。に。適。し。め。と。云。け。せ。め。ひ  
 け。甲。叔。領。承。し。帰。り。婦。人。此。を。ゆ。き。次。日。復。来。く。公。の。意。を  
 謝。し。け。費。公。極。意。に。慰。諭。し。又。婦。と。婚。せ。んと。欲。す。者。わ。ら。む。  
 當。堂。へ。開。白。出。へ。と。諭。知。せ。し。其。令。下。ると。即。時。の。婚。状。を。投  
 する。者。あ。む。誰。や。と。費。公。已。を。驗。す。即。前。日。頭。と。持。来。り。王  
 五。費。公。即。婦。人。を。喚。上。と。曰。汝。が。夫。と。殺。の。真。犯。今。已。み。明。又。犯。を。た。わ。し  
 汝。知。ら。ず。否。や。婦。人。答。て。胡。成。と。云。々。費。公。曰。い。や。と。胡。成。み。非。ず。真



犯者汝と王五と西人んと其言未了らざるふ二人大に駭き面色土の如く  
 成と慄に振ひく猶も冤証ありと争て辨しけむ。費公婦人の向て  
 曰。已み久し其情と察し知る然れども遅々として言せざる。若  
 若萬一の屈み成んると恐る。故に尸未井より出さざる何を確言と  
 且夫と云度を指し云。是夫の尸井の中在るのを疾く知る故に  
 五に向て曰。頭の在る處汝能知る事の熟ある。如此急に其頭を指來る  
 者。西人速み合んと欲するが故と云王。西人一言も出するの能は  
 並に嚴く械しけむ。果しく西人吐實をぞしる。蓋王五久しく婦人  
 私通しるが。其夫をたを殺し居る。折しは胡成が戲どの公事。二

遂に幸よくくらく又出さる。因り乃胡成が罪を釋し。馮安が証告を  
 續しく重く咎らる。徒罪三年を前卷より言つけらる。事已み明白の結  
 証罪の懼る者一人も無でると也。

大原獄

大原地の民の姑婦共の寡の者有る。其姑中年の身の悪くあり。是  
 是故に村の無頼子毎夜來て其家の宿まり。婦をたぐる。姑慚憎する事  
 けむ。門戸を墻垣のり何とて用心をせしめらる。姑益々其事  
 托し。婦を逐かんとす。姑益々其事。姑益々其事。姑益々其事。姑益々其事  
 其誰と云度を知らず。婦を鞠し至る自ら知る。因り婦を



喚出しく問婦果しく是と知りしく其名を指して奸情を以て熅<sup>あ</sup>熅<sup>あ</sup>歸す。縣令其名を捕しく喚出しく九<sup>い</sup>九<sup>い</sup>即無賴子至る。縣令是れ問ふ。無賴子答く曰兩人共れ私なる所無し。彼姑婦常れ不和なる故に安言しく互れ相抵毀る。縣令曰左非<sup>ひ</sup>ト一村の内百餘の人何ぞ獨汝れ誣せんやと重く咎<sup>とが</sup>口<sup>くち</sup>口<sup>くち</sup>無賴子頭を叩く責と免<sup>ま</sup>免<sup>ま</sup>んるを乞て。かねて婦と通せると申<sup>ま</sup>申<sup>ま</sup>乃婦を械しく鞠する。婦終<sup>つひ</sup>承せざる故婦を逐<sup>お</sup>逐<sup>お</sup>せり。婦怒しく憲院に告ぐれども。憲院仍久しく決まる夏<sup>なつ</sup>旋<sup>まわ</sup>るも。時に臨<sup>ま</sup>臨<sup>ま</sup>晋<sup>しん</sup>地<sup>ち</sup>の令孫柳下と云人獄と折く才ゆりと世間<sup>よ</sup>うと推<sup>お</sup>推<sup>お</sup>けは。憲院遂<sup>つひ</sup>此案を臨<sup>ま</sup>臨<sup>ま</sup>晋<sup>しん</sup>下<sup>か</sup>しく孫柳下と折せらる。孫公一<sup>ひと</sup>把<sup>は</sup>の人を盡く呼<sup>よ</sup>呼<sup>よ</sup>き到着<sup>とちやく</sup>し九<sup>い</sup>九<sup>い</sup>略訊る事一週しく。

皆先監<sup>けん</sup>寄<sup>き</sup>を託<sup>たく</sup>す。隸<sup>れい</sup>人<sup>にん</sup>の命<sup>いのち</sup>と磚<sup>たん</sup>石<sup>せき</sup>刀<sup>とう</sup>錐<sup>すい</sup>の類<sup>るい</sup>を集<sup>あ</sup>集<sup>あ</sup>め質<sup>しつ</sup>明<sup>めい</sup>入<sup>い</sup>用<sup>よう</sup>次第<sup>じだい</sup>早<sup>はや</sup>速<sup>すみ</sup>出<sup>いで</sup>す。衆<sup>しゆ</sup>人<sup>にん</sup>其<sup>その</sup>意<sup>い</sup>を解<sup>と</sup>解<sup>と</sup>さす。始<sup>はじめ</sup>命<sup>いのち</sup>の身<sup>み</sup>を備<sup>そな</sup>備<sup>そな</sup>わたり。叔<sup>しやく</sup>孫<sup>そん</sup>公<sup>こう</sup>明<sup>めい</sup>日<sup>にち</sup>早<sup>はや</sup>朝<sup>あさ</sup>の堂<sup>どう</sup>に遣<sup>や</sup>遣<sup>や</sup>はす。諸<sup>しよ</sup>具<sup>ぐ</sup>已<sup>い</sup>備<sup>そな</sup>備<sup>そな</sup>わると告<sup>つ</sup>告<sup>つ</sup>す。悉<sup>しつ</sup>く堂<sup>どう</sup>上<sup>じやう</sup>の置<sup>お</sup>置<sup>お</sup>しめ。乃<sup>すなは</sup>犯<sup>はん</sup>者<sup>しやく</sup>共<sup>ども</sup>を喚<sup>よ</sup>喚<sup>よ</sup>き又一<sup>また</sup>々<sup>また</sup>略<sup>りやく</sup>訊<sup>しん</sup>し。乃<sup>すなは</sup>姑<sup>こ</sup>と婦<sup>ふ</sup>と向<sup>むか</sup>向<sup>むか</sup>て曰<sup>い</sup>曰<sup>い</sup>婦<sup>ふ</sup>婦<sup>ふ</sup>未<sup>ま</sup>定<sup>ぢやう</sup>ま<sup>ま</sup>ずといども。奸<sup>けん</sup>夫<sup>ふ</sup>を既<sup>すで</sup>確<sup>かく</sup>確<sup>かく</sup>し。汝<sup>な</sup>が家<sup>いへ</sup>を元<sup>もと</sup>來<sup>きた</sup>青<sup>せい</sup>門<sup>もん</sup>ある。一時<sup>ひととき</sup>匪<sup>ひ</sup>人<sup>にん</sup>の誘<sup>よ</sup>誘<sup>よ</sup>き致<sup>いた</sup>致<sup>いた</sup>す。夏<sup>なつ</sup>あまの服<sup>ふく</sup>を全<sup>ぜん</sup>く彼<sup>か</sup>無<sup>む</sup>賴<sup>らい</sup>子<sup>し</sup>に在<sup>あ</sup>在<sup>あ</sup>り。今<sup>いま</sup>乃<sup>すなは</sup>石<sup>いし</sup>共<sup>ども</sup>の堂<sup>どう</sup>上<sup>じやう</sup>の女<sup>むすめ</sup>姑<sup>こ</sup>婦<sup>ふ</sup>共<sup>ども</sup>自<sup>みづか</sup>自<sup>みづか</sup>取<sup>と</sup>り。奸<sup>けん</sup>夫<sup>ふ</sup>を擊<sup>う</sup>擊<sup>う</sup>殺<sup>ころ</sup>す。一<sup>ひと</sup>のひけは。姑<sup>こ</sup>婦<sup>ふ</sup>共<sup>ども</sup>の避<sup>ひ</sup>避<sup>ひ</sup>遁<sup>とん</sup>の抵<sup>たい</sup>償<sup>ちやう</sup>ある。夏<sup>なつ</sup>あまを恐<sup>おそ</sup>恐<sup>おそ</sup>む。暫<sup>しばらく</sup>く越<sup>こ</sup>越<sup>こ</sup>す。孫<sup>そん</sup>公<sup>こう</sup>其<sup>その</sup>意<sup>い</sup>を察<sup>さつ</sup>し。曰<sup>い</sup>曰<sup>い</sup>汝<sup>な</sup>等<sup>ら</sup>遠<sup>とほ</sup>慮<sup>りよ</sup>す。事<sup>こと</sup>勿<sup>な</sup>勿<sup>な</sup>し。我<sup>われ</sup>云<sup>い</sup>云<sup>い</sup>はるる。宣<sup>のたま</sup>ひ乃<sup>すなは</sup>姑<sup>こ</sup>婦<sup>ふ</sup>共<sup>ども</sup>の并<sup>なら</sup>起<sup>た</sup>り。石<sup>いし</sup>を擦<sup>す</sup>擦<sup>す</sup>り交<sup>ま</sup>交<sup>ま</sup>に投<sup>な</sup>投<sup>な</sup>る。婦<sup>ふ</sup>も恨<sup>うら</sup>恨<sup>うら</sup>む。

非月録卷之六



夏已不<sup>レ</sup>久<sup>一</sup>一<sup>レ</sup>刃<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>刃<sup>レ</sup>を以<sup>テ</sup>て殺<sup>ス</sup>せん<sup>ト</sup>。媪<sup>レ</sup>に刀<sup>ヲ</sup>を與<sup>ヘ</sup>ル<sup>レ</sup>バ<sup>レ</sup>遂<sup>ニ</sup>に<sup>レ</sup>果<sup>ス</sup>ル<sup>レ</sup>。孫<sup>ノ</sup>公<sup>ノ</sup>刀<sup>ヲ</sup>を奪<sup>ヒ</sup>返<sup>シ</sup>て<sup>レ</sup>曰<sup>ク</sup>。湫<sup>ノ</sup>婦<sup>ノ</sup>我<sup>ノ</sup>氣<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>知<sup>ル</sup>。遂<sup>ニ</sup>に<sup>レ</sup>其<sup>ノ</sup>情<sup>ヲ</sup>を得<sup>ル</sup>。此<sup>ノ</sup>深<sup>ク</sup>乃<sup>レ</sup>結<sup>ス</sup>。尾<sup>ノ</sup>定<sup>ス</sup>。

尾定

奇說排門録卷之七下畢



